

〈研究ノート〉

## 日本におけるランプ産業の発展と変容

荒木 康 代

### 要旨

本研究は、幕末に日本に入ってきた石油ランプの普及過程とそれによる生活の変化、さらにランプ産業の発展と変容について考察分析したものである。明治期に急速に普及したランプは人々の生活を大きく変えたが、大正期には電灯の普及によって、日常生活で使われることはほとんどなくなった。しかし、それにも関わらず、ランプの生産はむしろ増え続けた。本研究の目的は、日常生活から消えてしまったにもかかわらず、ランプ産業はなぜ生産を増加していくことができたのか。どのように経営環境の変化に対応し、存続していったのか、その原因を明らかにすることにある。大正期、ランプ生産が増加していった主な理由は海外輸出の増加であり、輸出が減少した昭和戦後期、ランプ産業を支えたのは農漁業、鉄道・船舶等の作業用、産業用であった。本研究では、このようなランプ産業の変化について、現在国内で唯一残っているランプ製作所の事例とともに、分析考察する。また、研究からは、ランプ産業が他産業、特にガラス産業の発展に与えた影響も少なからずあったことが明らかになった。

### キーワード

石油ランプ、ランプ産業、経営、照明、ガラス産業

## はじめに

現在では、石油を燃料とする照明器具であるランプ（以下ランプ）が日常生活で使われることはほとんどなくなった。ランプというとキャンプで使うランタンや部屋のインテリアとしての用途が思い浮かべられる程度である。しかし、かつては日常生活に用いられる照明としてもっとも一般的なものであった。ただし、日本ではランプが日常生活で実際に用いられた期間は短い。なぜなら、ランプが日本に入ってきたのは幕末だが、その後まもなく電気照明やガス照明も日本に導入されるようになり、電気やガスが急速に普及していったからである。もっとも、電気照明が家庭に普及するには時間がかかったため、その間はランプが日常の様々な場面で使われた。明治末には都会での電気照明は日常的なものとなり、大正から昭和にかけては日本全国にも普及したため、日常生活でランプが使われることは急速になくなっていった。では、そのことによって、ランプ産業も消滅してしまったのかというと、そうではない。ランプは産業用や輸出用として用途を変えて生産が続けられたのである。

本論文では、ランプがどのように普及していったのか、またランプ産業はどのように発展し、そして変化していったのか、後半では、日本で唯一のランプ製作所の事例を含め、過去の歴史をたどりながら考察していきたい。

### 1. ランプが日本に入って来た

ランプがいつ頃日本に入って来たのかについては諸説があるが、一般に幕末だと言われている。石井研堂によれば、万延元年（1860年）に、林洞海が渡来した友人からもらったのが最初であるという。「油壺は総金属製にて、ホヤはバネ抑えへなり。珍物として来客ありし時など使ひ居りしが」石油が切れて使えなくなった。そこで越後から臭水油（石油）一樽を取り寄せて使ったということを経験談として載せている（石井研堂1997:336）。臭水油とは日本に古来か

らある油で越後（新潟）で採られた。また、三宅雪嶺「同時大観」によると、1859年（安政6年）越後長岡の鈴木鉄蔵が横浜のスネールという外国人から買って持ち帰り点火したのが最初だという（沢沢敬三1979：318）。

その他にも、当時居留地の横浜や神戸でのオークションで海外製品、海外文化が流入することが多く、外国人相手の商売をしていた日本人を通じてランプが入ってきた、という説もある。居留地内のオークションでは、外国商館から出品された様々なランプが取引され、「実に見事な装飾をほどこしたランプ、金属製のみではなくガラスを主に使用したもの、蠟石や切子硝子を配したもの、宝石にまごう色ガラスの仕組まれたもの、さては台ランプ、釣りランプ、柱かけランプ、大中小の空気ランプなど各種各様のランプ類」（佐々木源蔵1955：14）があった。いずれにせよ、幕末の開港によって、様々なルートから海外のランプが日本に入って来て、少しずつランプを使う者が始まったと考えられる。

明治3（1870）年には、大阪で松本重太郎が開店した「和洋反物処」という店で初めてランプが売り出された。松本重太郎は自伝の中で次のように言っている。「終には石油ランプなども売って見た、それも極極小さな商売であった。当時の石油一缶（只今の一箱の半分位）を買込んで分けたもので、その分たのを又フラスコ（明瓶）に入れて一本売をするのです。それからランプと申しても、僅かに二三打（ダース）位しか買込んではおきませぬ、まア何といふことはなく手当たり次第に売って見たのです」（石井 337）。当初、ランプは輸入物しかなく、しかも高価であったため、使うのは一部富裕層や料亭、旅館等に限られていた。明治初期の柏崎県半田村の某氏が東京から取り寄せた輸入ランプの値段は、平芯五分吊ランプで2円30銭、平芯五分台ランプで2円60銭と極めて高額であった（照明文化研究所 1976：80）。

一方、建物の洋風化に伴い、ランプの街灯も取りつけられるようになった。1874（明治7）年、東京銀座に英国製ランプが点灯（読売新聞東京版、1874年12月14日朝刊）され、翌年には、東京府下「第一大区14小区に英国製街灯96基が増設された」（読売新聞東京版、1875年10月2日朝刊）。同時期にガス灯、電気灯もあいついで設置が始まっている。ガス灯はすでに1872（明治5）年、横

浜に石炭瓦斯製造所ができ、外国人居留地にガス灯の点火を始めていたが、明治7年に東京市内でも芝一京橋間にガスの街灯が設置、点灯されるようになった。電気の明るさは石油ランプもはるかに及ばず、ガス灯とくらべても驚くほどの明るさで、多くの人々がその明るい灯を一目見ようと連日押しかけた。(石井 194)

このように、ランプ、ガス、電気がほぼ同時期に日本に入ってきたため、街灯も電気、ガス、ランプの競合となった。電気は、ランプやガスに比べて圧倒的に明るかったが、高額であったため、当初普及に関しては、ランプやガスに及ばなかった。下の表1に見られるように、明治末年までは東京でも、街灯はランプが圧倒的に多かったのである。

表1 東京市内の電器、ガス、ランプ別街灯普及率

年次	ガス灯	電気灯	洋灯(ランプ)
明治 32 年	1,081	244	49,651
明治 33 年	1187	261	56,391
明治 34 年	1298	179	59,980
明治 35 年	1399	185	66,757
明治 36 年	1632	204	72,179
明治 37 年	1763	236	79,643
明治 38 年	1863	—	84,648
明治 39 年	1927	269	87,974
明治 40 年	2381	271	94,160
明治 41 年	2509	315	92,607
明治 42 年	2851	340	101,141
明治 43 年	3325	356	106,352
明治 44 年	3855	417	76,290
明治 45 年	4646	643	92,136

(宮本馨太郎1964:131)

では、一般家庭の照明はどうだったのだろうか。幕末にランプが日本に入ってきて以後、ランプは瞬間に全国に普及した。明治7年1月6日の新聞「郵便報知」には、山口県の祇園社祭礼で商家がランプ数点を燈し、まるで「白昼の如し」という記事を書いている(渋沢 318)。それ以前の日本の行燈や提灯に比べると、はるかに明るく、当時の人々にとってはまさに白昼の如く感じられ

## 日本におけるランプ産業の発展と変容

たのだと思われる。ランプを見た人々は、一様に「昼間のように明るい」とか、「夜があけたようだ」「畳の目が一つ一つ数えられる」と感心した（渋沢 339）。

1885（明治18）年には東京瓦斯株式会社、1886（明治19）年には東京電燈会社が発足し、ガス供給、電気供給が開始されたが、普及には時間がかかった。明治中頃の東京の室内照明は、下の表 2 に見られるようにガスも電気もまだまだ少なく、ほとんどの室内照明はランプであった。しかし、明治も終りに使づくにつれて、家庭でもガス灯、電気灯は急速に普及し、明治末年には、ガス灯、電気灯を使用している戸数は合わせて63万戸に達した。ただし、この中には、官公庁や企業、工場なども含まれているため、一般家庭、特に東京の周辺部ではまだまだランプが使用されていたと考えられる。その理由は、何よりもランプの値段が手ごろだったからだが、同時にガスや電気の光は室内用には明るすぎるという理由もあったようだ。

表 2 東京市内室内照明 ガス・電気別

年次	ガス灯(戸)	電気灯(戸)
明治 32 年	8,717	5,634
明治 33 年	12,483	6,846
明治 34 年	14,339	7,287
明治 35 年	17,036	10,051
明治 36 年	20,756	12,442
明治 37 年	24,484	13,885
明治 38 年	28,810	15,940
明治 39 年	39,130	34,406
明治 40 年	48,926	51,690
明治 41 年	67,870	79,252
明治 42 年	76,203	97,720
明治 43 年	86,538	113,812
明治 44 年	192,618	159,902
明治 45 年	267,560	360,152

（宮本 132より抜粋）

一方で、明治末期には発電所の竣工や配電体制の強化によって、電気、ガスはその需要を広げていった。それとともに、都市の一般家庭でランプが使われ

ることは急速に少なくなっていくが、地方ではまだまだランプは身近な存在だった。その理由は、電気の送電がまだされていなかったからである。そのため、明治時代の多くの地方の町村にとっては、「電燈・瓦斯の世界は遠い縁のない存在」(渋沢 333) だった。明治が終わるまで地方の人々にとって身近な照明はランプだったのである。

## 2. 地方へのランプの普及

「明治生活調査報告」によると、各地方にランプが入って来たのは、明治初年(山形・新潟・大阪)・2年(熊本)・5年(福井・徳島)・6年(宮城・石川)・7年(高知)・8年(鹿児島)・10年(茨城・埼玉・岐阜・和歌山・京都・広島・宮崎)となっており、明治10年頃までに、一応全国規模に広がっていたことがわかる(渋沢 337)。

各市町村にランプが入ってきた経緯を見ると、「商用その他で大都市や開港場に出、そこでランプを見て感心し、みやげに持ち帰ったという例がなかなか多い」。そして、「その内にその地方の雑貨屋などで売り出されるようになり、或いは行商人が売って歩くようになって、いっそう普及を促進した」(渋沢 338)。また、宮本はいくつかの事例をあげて、「ランプは先ず或る特定の人の手によって一町村内の或る特定の家にもたらされているのであるが、次第に商店なり行商人なりによって或る町村に販売ルートが開拓せられて、ランプは各家庭に広く採用されることになる」(宮本 152) と述べている。行商人は、硝子製品を主とするランプ附属品一式を大きい竹籠に入れて、天秤棒でかついで回ったが、その姿は、明治20年頃から始まり、当時はどこでも見る事ができたようだ。

このような行商人の活躍は明治20年頃から始まっており、各町村に彼らが訪れて販路を拡張した。ランプの普及と共に、ランプ一式や石油を販売する店も増えていった。ランプを売る店や行商人は「ランプやさん」と呼ばれて珍重された(渋沢 338)。地方でも、たとえば、岩手県福岡町には「ランプさん」というランプ行商人がいて、ランプを売っていた。また、山形県念珠関村などには

ランプを売りに来た行商人がいて、アメリカからの舶来品だと説明していた。その他、三重県や京都府、岡山県等各地でも行商人からランプを買ったということ宮本は聞き取りから明らかにしている。また、同時期、ランプを売る店も各町村で現れるようになった(宮本 152)。このようにランプを売る行商人の存在やランプを売る店が始まることによって、ランプは地方にも広がっていった。

ランプが急速に地方にも普及していった理由は、「ランプはアンドンやロウソクよりも遥かに明るかったから」「種油より石油の方が安かったから」「電燈の如く多額の出費を必要としなかったから」等、その明るさとコストが最大の理由であった。特に、その明るさは、それまでの暗い光しか知らなかった当時の人々にとって驚異的であり、「アンドンに比べて非常に明るく、まるで昼のようだ」と感じられた(宮本154)。

このような地方への普及によって、人々の働き方も大きく変化することになった。養蚕用にもランプが使われるようになり、夜も起きて世話しなければならない養蚕の仕事も楽になった。特に「日露戦争後の好況時代には一層広く行われ、養蚕地では殆ど村中が使い始めた処もあった」(渋沢 340)。すでに1905(明治37)年に「特許中原式養蚕洋燈」として、養蚕用ランプの広告が新聞に掲載している。それによると、養蚕家の桑葉取扱場や料理店、芝居座、工場、店頭、汽車客車、船舶、停車場など広く使え、戸外の強風雨でも火が消えない構造になっており、火災の恐れもなく、臭気もない。その上、明るさも白熱灯やガス燈以上だとしている(朝日新聞東京版、1905年4月10日朝刊)。その他に、ランプは漁業でも用いられた。特に、夜間の漁の際の照明として用いるのに便利であった。また、信号燈、船舶燈など船舶用や鉄道用にも使われたのである。

ただし、ランプの普及には地域差がかなりあったようだ。たとえば、広島県八重町では、明治30年ごろには、官庁、大商店、医師、地主らはランプを使用していたが、農家に普及したのは、大正5、6年頃であった。しかも一般農家ではランプを購入しても、使うのは祭りや盆・正月、集会の時だけで、日常はカンテラやコエマツをともしていた。(渋沢 340)

ここまでをまとめると、ランプは1877（明治10）年ごろまでに全国に広がっていったものの、一様に分布したわけではなく、官庁や一部富裕層等に限られた。その後、明治末年から大正期にかけて地方の農村にも広がっていった。ランプが広がっていった理由としては、まず第一に、それまでの照明に比べてはるかに明るかったこと、コストが安かったこと、持ち運びもでき便利だったことがあげられる。このような理由で、ランプはまたたくまに全国に広がった。日常生活のみならず、農作業や養蚕、さらには漁業や鉄道、船舶の安全燈としても使用されるようになった。さらに、人々の生活も大きく変わり、長い夜の時間を仕事や余暇に使えるようになった。また、従来から夜中も世話しなければならぬような養蚕の夜の作業も便利なものになったのである。このように、ランプの登場は人々の生活を大きく変えた。以下では、ランプの生産を担っていったランプ産業について見ていきたい。

### 3. 国産ランプの誕生

ランプの主な構造は、ガラス・金属・陶器などで造られた油つぼとつぼの上部につけられた真鍮製の口金（バーナー）、さらに炎を風から守るために芯を覆う筒形のガラスであるホヤ（火屋）からできている。口金には木綿糸を編んだ芯を通して、油つぼの石油を毛細管作用により吸い上げ、それに点火するという仕組みになっている。芯には平芯、巻き芯（筒形しん）、紐芯（棒しん）があり、平芯の種類はその幅から二分芯（幅0.61センチ）、五分芯（幅1.6センチ）、八分芯（幅2.42センチ）がある。一般の家庭では、三分芯、五分芯が使われた。これに鉄などの吊金具で油つぼを支え、光を反射させるための笠を取りつけたものが吊ランプであり、ガラス・金属・陶器などの台の上に油つぼを取りつけたものが台ランプである（照明文化研究所82-85）。このなかで、ガラス製の油壺、石笠、シェード、グローブなどが「燈火用ガラス製品」と呼ばれていた（杉江重蔵1950：224）。一方、ランプを「形で分類すると、釣ランプ、台付ランプ、壁掛ランプ、下向きランプ、手提ランプ、豆ランプであり、用途の上から分類す

ると、一般用、農業用、漁業用、鉱山用、船舶用、自動車用の七種に大別される」(杉江 224)。

ランプはそれまでの照明に比べて格段に明るかったことから、急速に普及していったが、それにともない火事も頻発するようになった。明治5年には、神田旅籠町でランプの火から火事が起こったことから、「近来ランプ流行して、毎戸に点灯し、人々愛翫ぶ云々」として、ランプを取り扱う際の注意事項が東京府から出されている(石井 338)。そこで、ランプによる火事を防ぐため規制が強化されるようになった。1910(明治43)年の二六新聞によると、「下宿屋営業取締の結果、今度市内の各下宿が警視庁直轄となり、凡ての取締りが厳重になり、(中略)日常用ふるランプの如き其筋にては何とか改良せざれば火事の恐れあり」ということで、油壺は割れやすいガラス製ではなく、金属製にすること、土台も重いものにして転倒しにくいようにすることが義務づけられた。(渋沢 301)。このことから、油壺はガラス製ではなく金属製になっていった。

明治初期、輸入ランプは非常に高額であったが、同時にガラス製のホヤは破損しやすく、代りのホヤも非常に高価であった。輸入ランプのホヤ1個の値段は18～9銭、石油も1升で7～80銭だった。(佐々木 21)。米1升8～9銭の時代である。とても、一般庶民が日常生活に使える値段ではなかった。そこで、国産のホヤを安く作ろうと考える人々が出てきた。すでに、江戸時代から風鈴や簪等をガラスで作る「ビードロ細工師」がいたため、ガラスの製造技術の蓄積はあった。

早くも、1866(慶応2)年には、大阪で伊藤庄三郎と久米長兵衛が、また東京では1869(明治2)年に加賀屋皆川久兵衛や上総屋在原留三郎らがホヤの製造を開始している(杉江 226、佐々木 22)。京都では、1870(明治3)年、府営の舎密局硝子工場が創立され、東京では1873(明治6)年、品川の本格的な洋式ガラス工場である興業社が設立された。その後同社は工部省に買い上げられ、1876(明治9)年、官営品川硝子製作所が誕生した。同製作所では、ランプのホヤの他、油つぼや板ガラス、模様ガラスなどが製造された(照明文化研究所80)。明治初期、洋風建築の増加により板ガラスの需要は高まっていたが、その製造は極めて困難であったため、ガラス産業界では壺やランプ用ガラス製

品、特にガラスホヤの生産に重きを置いていた。

明治7年頃には、東京日日新聞に「舶来ランプのみならず、和製のランプも出回り東京市内にランプ普及す」（照明文化研究所81）と書かれるようになっていたが、海外製品のような品質のホヤを作るのは容易ではなかった。同年の「郵便報知」でも、近年「紙張りの行燈」は衰えてランプの使用が盛んになっているが、国産のガラスは割れやすく、品質は輸入物に及ばないとして、「衆人洋製を愛して和製を愛せず」と書いている（渋沢318）。国産のホヤはなかなか売れなかったのである。

1902（明治34）年の朝日新聞東京版の記事では、硝子の需要は増加しているが、まだ発達途上であると述べており、製品の種類により、ビール壺等の壺工場、食器工場、ランプホヤ工場に分類したうえで、次のように述べている。ビール瓶の製造は発達しているが、その需要は少ないため、製造もほとんど2、3の製造所に限られる。食器工場は製造工場自体まだまだ少なく、また熟練の職人もきわめて少ないため、その発展は遅々として進まない。さらに、板ガラスはほとんどが外国製で日本での生産は失敗が続いている。一方、ランプホヤはその販路も広く、工場も多数あるが、東京の製品は価格が高いため販路は関東地方に限られ、全国に渡っている大部分は大阪の製品である（朝日新聞東京版、1902年3月31日朝刊）。

このように、ランプ生産に関しては大阪が先んじていた。すでに慶応年間に伊藤、久米両氏によってホヤの製造が大阪で始められており、明治に入ると、ホヤ以外にも、ランプの笠や口金、ランプ芯など様々なランプ用品の生産が大阪で始まっていった。

朝日新聞大阪版の広告を見ると、「京町堀四丁目稲荷裏に寄留する作州津山の中村英二氏が発明せし紙製のランプの燈心」（朝日新聞大阪版、1879年10月10日朝刊）や「弊舗製造ランプ心議今般第二内国勸業博覧会に於て褒状を賜り候に付兼愛顧の諸君へ右広告仕り度且亦以前より猶一層勉勵を加へ（略）ランプ心製造所 小山猪三郎」（同1881年8月5日朝刊）など、ランプ芯の製造が始まっていたことがわかる。さらに1880年代になると、新聞のランプ広告も急激に増えている。たとえば、朝日新聞大阪版朝刊には「塩津多賀 ランプ類 メイ

## 日本におけるランプ産業の発展と変容

トウ」(1879年)「柴田重兵衛 伊藤契信 赤松弥七ほか 劇薬壘 ガラス鍋  
ランプ」(1880年)「和田喜三郎 吉村弥助 稲田庄右衛門 ランプ笠 ヨクテ  
ル」(1880年)「駒井庄太郎 ランプ薬瓶」(1880年)「小山猪三郎 ランプ芯  
内国博で褒状」(1881年)「奥村理三郎 ランプ口金」(1881年)などのランプ広  
告が頻繁に載っている。

さらに、ランプの口金(バーナー)の生産も大阪で始まっていた。長野県飯  
田市出身の硝子商平栗種吉が、「石油ランプ口金が輸入品なるを以て之を模造  
せんことを思ひ立ち」工夫をした後完成させ、1880(明治13)年に阿部平兵衛、  
岡本清忠とともに大阪で「赤心社」を設立し、ランプバーナーの国産化を始め  
た。しかし、資金的に行き詰まったため、その後、村山龍平や芝川又平の資金  
提供を受け、村山龍平、芝川又平、平栗種吉の名前から、1881(明治14)年三  
平舎が設立された(佐々木30)。同年、以下の新聞広告が出ている。

「三平社製造バーナー発売広告 従来我国に用ゆる『ランプ』口金ハ専ら米  
国製を輸入し来り候処今般我社に於て製造販売す。其光明なるは米国製に  
優り其価の如きは却て廉なり。乞御購求有んことを。大坂伏見町四丁目  
奥村理三郎 同京町掘通一丁目 玉泉社」

(朝日新聞大阪版、1881年12月10日朝刊)

創業当初は外国製品に比べて品質も悪く、原価も高かついた上、同業他社の  
参入により、競争が激化し、経営は困難を極めた。しかし、製品品質の向上や  
機械の改良、コスト削減の結果、1883年にはランプ口金(バーナー)の値下げ  
を行っていることが同年5月4日の朝日新聞大阪版朝刊(1883年)に広告とし  
て載っている。佐々木によると、明治20年には、年間生産能力が創業当初の25  
倍以上の232万8400個になり、職工数も当初の20人程度から186人まで増加し  
た。明治22年には、創業後9年間の総決算として5万円の利益を上げるまでにな  
り、これを資本金に組み入れ、有限会社三平社とした(佐々木38)。このよ  
うにして、1880年以降輸入ランプだけでなく、国産ランプも急速に普及してい  
き、ホヤ及びランプ用品を製造する工場はますます増えていった。

#### 4. 国内需要から輸出へ

しかし、明治末期になると、電燈の普及により日常生活でランプは徐々に使われなくなっていった。それを象徴するように、1929（大正4）年にはランプの口金を作っていた大阪の三平社が廃業している。ホヤやシェードなどのランプ用ガラス製品を作っていた企業は輸出用に注力するか、あるいはガラス製洋食器などの生産に分化していった。

灯火用品の輸出は、1880（明治13）年、長崎で制作されたランプホヤの輸出が最初（杉江141）だが、明治期のランプ生産の中心はあくまでも国内需要であった。しかし、その後、国内需要の減少に伴って、海外が新たな販路として脚光を浴びるようになった。それを象徴するように、大正15年の朝日新聞に「昔を今に・・・ランプの輸出 ガラス屋さんホクホク」という見出しで次のような記事が載っている。

◇近頃豪州へ日本の家庭用ランプとホヤが輸出される。それも昨年十月頃はホンの僅かなものであったが、昨今は郵便でも商船でも、毎年二萬や三萬個は積込むといふ。◇それにランプとホヤの外、日本紙で製造したランプのカサも同様輸出されるが、豪州ではメルボルンやシドニー等の都市以外少し片田舎に入るとことごとくランプを使ふ程電気事業が発達していない。◇今までこんなものを製造しなかったガラス会社が、にはかに昔に倣ってランプ製造を始め出した。（以下略）（朝日新聞東京版、1926年4月21日朝刊）

このような輸出の伸びによって、ランプ製品の生産高は以前よりも増えていった。下の表3は、1912（大正1）年から1923（大正12）年までのランプ用品の生産高だが、大正期に急増していることがわかる。

日本におけるランプ産業の発展と変容

表3 燈火用品生産高

単位：1,000 個

大正	燈火用品
1	805
2	861
3	870
4	1864
5	1554
6	2625
7	3914
8	2874
9	3324
10	2474
11	2042
12	2234

(杉江 241)

さらに昭和に入っても、ランプの輸出は伸び続けた。昭和12年のホヤの輸出額46万8千円に対して国内向けはわずか3万2千円で、輸出用は国内向けの15倍になっている。国内消費は6%に過ぎず、生産されたランプの95%近くが輸出されたのである。一方、笠は電燈にも使われることから国内向け需要の方が多かった(表4)

表4 燈火用ガラス製品の輸出と内地需要の割合

(単位,1000 圓)

	昭和12年(1937)			昭和13年(1938年)		
	輸出額	内地向	割合	輸出額	内地向	割合
ホヤ	468	32	15:01	300	19	16:01
油壺	232	19	12:01	97	10	10:01
笠	304	769	0.4:1	327	785	0.4:1

(杉江 244)

ランプ産業の中心地である大阪には、明治期からランプホヤを作っている硝子製造所が多く、また、ランプを輸出する業者も多かった。以下の表5は1880年～90年代に大阪で創業した主な工場とその製品である。

表5 大阪におけるホヤ製造工場

創業年	名称	製品	住所
1881	寺村屋号硝子製造所	ホヤ	大阪市南区
1885	木村硝子製造所	ホヤ	北区
1886	津田硝子製造所	ホヤ、シェード、グローブ	西区
1886	桐重硝子製造所	ホヤ 輸出向きホヤ	北区
1887	鈴木硝子製造所	ホヤ、笠	南区
1890	宮鈴号硝子工廠	ランプ、ホヤ、信号灯、船舶燈	大阪
1890	清水硝子製造所	豆ランプ 油壺 ホヤ	北区
1892	和田硝子製造所	ホヤ、笠、	浪速区
1894	亀井硝子製造所	ホヤ	北区

(杉江 230-248から筆者抜粋、作成)

上記の多くの工場ではホヤを主に製造していたが、それ以外にもシェード（ランプの笠—石笠と呼ばれた）を製造する工場もあった。このようなランプ用ガラス製品を製造する工場は、「1911年（明治末年）には大阪に40余工場を数えるまでになった。」（杉江 226）。上記の工場の中には、ホヤだけでなく、ランプそのものも手掛ける工場もあり、また、ほとんどの工場では、輸出用ランプのホヤも作っていた。

明治末から大正にかけて輸出用燈火製品はほとんど大阪で製造されており、東京の製品は主として国内向きに供給されていた。1909（明治42）年度に大阪府硝子製造同業組合が、輸出用として注文を受け製造した主な製品の総額1,879,048円の内、燈火用品は、443,492円で、壘類704,965円に次ぐ2位となっており、これは全体の約24%である。その4分の1はランプ、ホヤ、シェードであった。（杉江 242）。表5の硝子製造所の多くも中国やインド、南洋等に輸出をしていた。

## 5. 八尾のVランプ製作所の事例

ここからは、現在日本で唯一国産ランプを製造している大阪府八尾市のVラ

ランプ製作所について、その創業からの歴史を振り返ってみたい。同社の創業は、1924（大正13）年、現代表D氏の曾祖父が大阪市東区でハリケーンランプの製造を始めたことによる。その後、紆余曲折を経ながら、現在の五代目まで受け継がれてきた。現在、同社は様々なオイルランプを作っているが、その主力商品は創業期からのハリケーンランプである。電気の普及により一般的には衰退してしまったと考えられるランプ製造事業がどのように継続されていったのか、大正期以降のランプ産業の変化も鑑みながら考察していく。調査は主に現代表のD氏およびその母親で四代目のC氏からの聞き取りと同社の資料を基にしている。聞き取りは2019年から2021年まで数回にわたって行った<sup>1</sup>。

ハリケーンランプは、ハリケーンランタンとも呼ばれ、その名称の通り嵐でも炎が消えない屋外用石油ランプである。現在ではキャンプなどで使われることが多い。ハリケーンランプは、19世紀後半を舞台にしたアメリカ西部劇映画でしばしば小道具として使われており、当時のアメリカでは屋外用によく使われていたことがわかる。また日本では、高度成長期以前まで、養蚕や馬小屋、厩舎、また船舶用に日常的に使われていた。

屋外で使われるハリケーンランプが誕生したのは、19世紀の終わりから20世紀のはじめにかけてである。1840年に石油ランプのメーカーとして設立されたアメリカのドイツ社や、1893年に創業し1902年から製造を開始したドイツのフェアハンド社がハリケーンランプのメーカーとして有名である。ハリケーンランプが日本に入ってきたのは大正期ではないかと考えられる。その頃はすでに電気照明がかなり普及していたため、一般家庭用として使われることは少なかったが、養蚕や家畜小屋、漁業用照明や船舶・鉄道照明などの産業用に使われた。また、「輸出ランプのうち南洋向きのハリケーンランプは戦前から多量に製造されていたが、需要は輸出向だけだったので、その製造工場は余り多くなかった」（杉江 237）。

Vランプ制作所三代目B氏（1926-2006年）の手記によると、同社が創業したのは、1924（大正13）年8月であり、創業者は現代表の曾祖父にあたるA氏

---

1 聞き取りは、2019年4月29日、同6月8日、7月19日、2020年2月19日、2021年4月5日に行った。

(1887-1952年)である。初代A氏は当初、兄の経営する珙瑯(ホウロウ)工場  
で働いていたが、1924(大正13)年8月に独立し、大阪市東区(現天王寺区)  
で個人経営として創業した。37歳であった。当初は、「珙瑯鉄器メーカー」で、  
「家庭用品のみ」を製造していた(B氏作成の会社経歴書より)が、ある日、得  
意先から、ハリケーンランプの製造を打診され、ランプ製造に取り掛かること  
になった。A氏は、ドイツのフェアハンド社からランプを取り寄せ、それを  
参考に制作を始めた。A氏の息子の三代目B氏は、当時の状況について、手記  
に次のように記している。

当社は設立時はドイツのフェアハンド社の“石油ランプ”をモデル  
にして生産を励みましたが、当時はわが国の国内にもメーカーが6.7社  
あり、設立当時は競争が海外よりの輸入品、また国内の同業者等々で大変  
な苦勞が有った、と多くの先輩から聞いております。その当時は今のよう  
な精密機械やロボットもなくすべてが手作りで、図面も無い金型を作り何  
度も試作を繰り返し、ただ頼れるのは職人の感(勘)と経験だけで金型を  
作り、0からランプを作り上げた先輩の苦勞に敬意を表します(今でも当  
時の金型が有りますが、どうして作ったか?考えの付かないものもありま  
す)。(B氏手記)

その後、「石油ランプの日本最大の輸入業者より国内でのランプの製作を  
勧められていた所、当時大阪で最大の金物問屋(当時の問屋さんは力が有  
りました)より、(もし石油ランプを作るなら当社で出来たランプを全部引  
き取り、国内はもとより輸出も行う)と言う話が有り、初代の決断で珙瑯  
鉄器からランプ製造に転換しました。長年馴染んだ珙瑯鉄器からランプへ  
の転換は勇氣と決断が要ったと思います。」(B氏手記)

このような状況の中、初代は10年近くの試行錯誤を経て、やっとハリケーン  
ランプを完成させ、手記にある問屋からの委託により製造を行うようになった。  
さらに、昭和8年(1933年)9月には、大阪市平野区に工場を移転し、本

日本におけるランプ産業の発展と変容

格的にハリケーンランプの生産を始め、同年12月には法人登記をした。平野区に移転した背景には、平野区にランプ製造所や販売店が多くあったからではないかと考えられる。

宮本によれば、大阪市平野区は明治期からランプ商や行商人が多かったと伝えられており、特に長吉村（大阪市平野区长吉出戸）の西出戸という所に住んでいた藪野というランプ行商人などの力がランプ普及に貢献したとされているからである（宮本 150）。

大正13年から昭和13年までの約15年間の大阪市内のランプ及び部品製造業の推移を見ると、大正13年に16件あった灯具製造業が昭和期に入ると減少しているが、昭和13年には再び増加に転じている（表6）。

表6 大阪市内の灯具及び部品製造業の推移

調査年	灯具製造業	内ランプロ金	硝子及同製品業	内ランプホヤ製造
大正 13 年	16	16	182	8
昭和 5 年	9		192	3
昭和 8 年	7		155	2
昭和 13 年	11		270	8

大正13年～昭和13年の「大阪市工場一覧」大阪市役所産業部より筆者作成

大正期に入ると、電気の普及により国内家庭用のランプ需要が急速に衰退した。しかし、その一方で大正末から昭和にかけて、ランプの輸出が盛んになり始めていた。大阪市統計書の「大阪港輸出貿易主要品の推移」によると、大正2年の大阪港からの輸出品総額は73,452千円で、その内ランプ及部品は490千円を占めていたが、大正14年には、輸出品総額500,673千円の内、1,796千円にまで増加している。12年の間に輸出品総額は6倍、ランプ及部品も3.6倍に増えているのである。その主な輸出先は東南アジアやインドであった（新修大阪市史編纂委員会1994：328）。また、大阪市平野区でも「灯火用器具」の製造は、大正4年の数量70,000個、価額224円から、8年には、数量112,630個、価額701円へと、製造数量は6.3倍、価額も3倍に上がっている（平野郷公益会1931：322）。

初代A氏もこのような輸出用需要増加の状況を知っていたのだろう。すでに家庭でランプが使われることは少なくなっていた時代に、A氏は北米、北欧、アフリカ、東南アジアへと輸出中心に事業を拡大していった。同時に国内の業務用にも、販路を拡大していった。電気などに比べて安価で便利な石油ランプは、養蚕用や畜産、漁業用の船舶などにはまだ多く使われていた。同社は、業務用と輸出用に照準を定めることによって、発展していった。

表7 昭和13年 大阪市内の灯具製造業

名称	創業	内容	人数	住所
杉森製作所	大正15年	船燈、車燈	10人未満	北区
(株)加藤武製作所	大正6年	金属洋燈	30~50人未満	東区
松原製作所	明治23年	船燈、車燈	10~30人未満	西区
合資会社森田商店	明治20年	船窓船燈	50~100人未満	西区
堀洋燈金属品製作所	大正2年	洋燈	10人未満	浪速区
(株)日本船用品製作所	昭和6年	船燈信号機救命器具	10~30人未満	浪速区
田辺金属製作所	昭和7年	ランプ	10人未満	東淀川区
伊藤周三	昭和7年	ランプ附属器具	10人未満	東成区
山口号金属製作所	昭和2年	金属 洋燈	10~30人未満	東成区
中島金属品工場	大正13年	魚集燈・鉦山燈	10人未満	旭区
合資会社Vランプ製作所	昭和8年	ハリカンランプ	50~100人未満	住吉区

「昭和十三年大阪市工場一覧」より筆者作成

表7の大阪市役所産業部による調査「昭和十三年版大阪市工場一覧」の「37. 灯具製造業（部分品及び付属品ヲ含ム）の業務内容を見ると、船舶用・車両用ランプ（4社）や漁業用ランプが多く、産業用ランプの生産が多かったことがわかる<sup>2</sup>。

同欄には、合資会社Vランプ製作所が大阪市内の他の灯具製造業と共に掲載されているが、従業員数は50~100人未満と他社に比べて多い。業務用及び輸出用ランプ製造が順調に伸びていったことが伺われる（ハリカンランプとはハリケーンランプのこと）。

同社は順調に規模を大きくしていったが、その背景には、特許の取得があっ

2 D氏によると、現在も大阪市内に船灯製造所があり、最近までハリケーンランプは船舶用に大阪港で使われていた（2020年2月19日聞き取り）。

日本におけるランプ産業の発展と変容

た。同社は本格的に生産を始めてから、次々に実用新案登録をした。残されている資料から見る限り最も古いものとしては、昭和11年2月には自転車用ランプ、壁掛け用ランプ、12年7月にはランプの口金の特許をとっている。それ以降も次々に特許を取得しており、初代はもっぱらランプの部品等の改良に工夫をこらしていたことがわかる。以下は、同社が出願登録したものである。

表8 Vランプ製作所特許登録出願

登録年月日	実用新案出願	名称
昭和11年2月24日	第14467号	壁掛兼用提「ランプ」
昭和11年2月24日	第14468号	自転車兼用提「ランプ」
昭和12年7月13日	第8629号	「ランプ」の口金
昭和14年7月19日	第11030号	耐風燈ノ排気筒支持装置
昭和14年4月18日	第12944号	耐風燈ノ火屋受版ノ支持杆支持耳片ノ取付装置
昭和15年6月1日	第18347号	手提、壁掛兼用耐風灯
昭和17年12月15日	第9358号	提燈(ランプ)
昭和24年	第277735号	耐風燈ノ排気筒支持装置

Vランプ製作所特許関係資料より筆者作成

また、下記のように、商標も出願登録している。

表9 Vランプ製作所実用新案登録

年月日	商標出願登録番号	名称
昭和11年8月10日	第13574号	winged wheel
昭和11年10月13日	第23419号	ShinShin
昭和24年1月19日	第13425号	バグス
昭和30年7月21日	第481264号	PUMA
昭和30年7月21日	第483059号	Mercury

Vランプ製作所特許関係資料より筆者作成

現代表D氏によると、特に北海道の厩舎では、同社のハリケーンランプが多く使われた。馬は神経質な動物で、嵐の日など、ランプの火影におびえて暴れるのだが、同社のハリケーンランプは嵐でも揺れることがなく、馬も暴れることが無かった。そのため、V製作所のランプは人気となり、北海道を席卷したという。(2019/6/18聞き取り)。

表10に見られるように、昭和に入ってからハリケーンランプの製造及び輸出は増えていった。そのため、昭和戦前期には、Vランプ製作所も最盛期となり、従業員は約200名、1日に2000個のハリケーンランプを製造するようになった（2019/6/18聞き取り）。

表10 1948（昭和23）年の燈火用ガラス製品輸出実績

			本船積値段(F.B.O)	
	数量	正味重量	(圓)	(ドル)
ランプ	22350 打	171,002	61,916,170	63,757
ランプホヤ	52,000 打	29,091	4,680,000	15,000
ハリカンランプ	72,280 個	30,822	18,779,524	42,744
セード	91,200 個	27,523	6,321,600	10,944
照明器具部品	2,561,000 個	101,754	60,850,414	178,537

(杉江 245)

1941（昭和16）年に太平洋戦争が勃発すると、ランプの需要も軍需用が中心になった。これは、同社に限ったことではなく、すべてのランプ製作所、さらにはすべての業種に共通する事であった。Vランプ製作所は陸軍指定工場となり、陸軍の監督下でランプの生産に当るようになった。B氏によると、ランプの「生産・販売等に制限」があったものの、「受注、材料の手配等は一切陸軍」が行っていたため、「当社はただ生産のみで非常に楽な時代でした」。ただし、「完全に陸軍の監督、支配下にありました」(B氏メモ)。終戦後の1947（昭和22）年には、ランプの輸出が許可され、再びランプの輸出が始まった。

1952（昭和27）年に初代が亡くなると、妻が二代目を継ぎ、同時期にA氏の息子のB氏（1928-2006）が24歳で同社に入社、その後、1978（昭和53）年に正式に代表に就任し三代目となった。

B氏の手記によると、「終戦直後は主材料のブリキが無く、缶詰の空き缶を延ばしそれでランプの部品を作り、ランプに仕上げた」り、「ランプのバーナーの芯は女性の帯芯を細く切り芯に」するなどしてランプを作ったが、材料の入手には苦労した。(B氏手記)

戦後は、全国的な電気の普及によってランプが使われることはますます少な

くなり、輸出も伸びなくなった。そこで、三代目B氏は代表就任後、輸出事業から撤退し、国内の農業用ハウス栽培用ランプに活路を見出した。適度の炭酸ガスを排出し、作物の光合成を促進するというランプの特性を生かし、農業市場を開拓することにしたのである。

Vランプが開発制作したランプは、新聞でも取り上げられた。同記事によると、岡山県笠岡市の県園芸センターでは、ハウス栽培の保温にろうそくを使うことによって、灯油暖房よりもコストを抑えることができ、氷点下になってもハウス内の最低温度を四度前後に保つことができるという結果を得ていたが、今回、灯油千百CC入りのランプでも実験を行った。その結果、ハウス内温度はロウソク並みの4-5度を保つことができるうえ、五十五時間連続して燃え、油代もわずか八十円と、ロウソクよりはるかに安上がりだということがわかったのである。同センターは、「ランプの場合は灯が作物の光合成を促進し、発生する炭酸ガスも作物の育成に効果をもたらすのではないか」と使用に乗り気であると記事は伝えている（読売新聞岡山版、1980年12月23日）

このように、1970年代後半以降同社は輸出用から農業用へと販路を変えてハリケーンランプの製造を続けるとともに、家庭電化製品部品の生産も手掛けるようになった。1982年の同社の営業品目は「1. ハリケーンランプ、2. 家庭電化製品部品」となっており、売上全体の約40%がハリケーンランプ、60%が家庭電化製品部品になっている。そして、その後紆余曲折がありながら、同社は今もハリケーンランプを製造し続けている。

## さいごに

幕末にランプが日本に入ってきてから、ランプのホヤを中心とするランプ製品の製造は、ガラス産業の中心をなしてきた。建築資材等に欠かせない板ガラスの製造がなかなか軌道に乗らない中で、ランプのホヤやシェードはガラス産業の中心として同産業界を支えた。当時は、多くの場合ガラス工場がランプを作っていたのである。佐々木硝子株式会社元会長で、「がらすやむかし語」の著

者である佐々木源蔵氏は次のように言っている。

「日本の硝子工業発達史には、先ず燈具を第一に考えなければならない。江戸末期迄家庭内の細工に止まって居た硝子工業が、一躍煙筒を必要とする工業に進んだのも、石油ランプに開発された事はいなめない」(佐々木60)。その後の電燈の普及によって国内のランプ需要が減少すると、多くのガラス製造工場は石油ランプの生産から離れ、洋食器や板ガラスの製造に移っていった。しかし、洋食器や板ガラス生産に至るまでの期間、ガラス産業を支えたのはランプ産業だったのである。

一方、ランプ生産工場のもう一つの道は輸出であった。すでに、ランプの輸出は明治初期から始まっていたが、大正期以降の国内需要の減少を補ったのは、海外展開であった。ランプが国内の日常生活で使われることは大正期を境に急減したものの、輸出用として戦後も生産された。また、農業や漁業、さらには船舶や鉄道の安全用など特殊な用途でも使われ続けた。特に、戸外で用いられるハリケーンランプは、輸出用とともに、国内では北海道の厩舎や農業用でも重宝された。V製作所の例で言えば、二代目の時代は輸出用に、三代目は農業用に注力することによって時代に適合したといえる。現在、ランプが実用で使われることはほとんどなく、インテリアとしての性格を強めている。そのような時代の中で、2013年、現代表D氏が五代目に就任した。五代目はランプにどのような活路を考えているのか、この点についての考察は別の機会に譲りたい。

## 謝辞

何回にもわたるインタビューにお応えいただき、資料も快く見せていただいたVランプ製作所の皆様に感謝申し上げます。

## 付記

本研究は、科学研究費補助金基礎研究C（一般）家族企業における経営と心性についての研究－女性経営者を中心に－(20K02150 荒木康代表)による助成を受けている。

参考文献

- 石井研堂 1997『明治事物起源 八』ちくま書店  
大阪市役所産業部 1924『大正13年版大阪市工場一覧』大阪市産業部  
大阪市役所産業部 1930『昭和5年版大阪市工場一覧』大阪市産業部  
大阪市役所産業部 1933『昭和8年版大阪市工場一覧』大阪市産業部  
大阪市役所産業部 1938『昭和13年版大阪市工場一覧』大阪市産業部  
佐々木源蔵 1955『がらすやむかし語』佐々木硝子株式会社  
渋沢敬三編 1979『明治文化史12生活』株式会社原書房  
照明文化研究所 1976『あかりのフォークロア』柴田書店  
新修大阪市史編集委員会 1989『新修大阪市史6巻』大阪市  
杉江重蔵 1950『日本ガラス工業史』日本ガラス工業史編纂委員会  
平野郷公益会 1931『平野郷町誌』清文堂出版  
宮本馨太郎 1964『燈火 その種類と変遷』六人社